

「実証的なデータがない」以外の3事項を挙げてみましょう。

まずは、性格の形成に深く関与する遺伝素因以外のさまざまな環境～発達要因への言及が乏しいこと。言わずもがなであるが、性格の形成には生物学的に規定された遺伝素因の他に、養育環境、生活史上の体験、外傷体験、精神障害を発症した経緯の影響など、多様な環境～発達要因が関与している。しかるに本書ではこれらの点に関する記述が極わずかしかみられず、この点が本書の説得力や臨床上の有用性を弱めている印象がある。著者が下坂幸三先生の薫陶を得ておられることをふまえると、評者にはこうした本書の傾向が不思議にも感じられました。

二番目は、従来の性格類型、特に我が国で提唱された類型との異同～重なりに関する考察がやや不十分なところである。たとえば、本書で提唱された「ヒステリー型性格」と安永浩が記載した「中心気質」の比較。評者の判断では、この両者にはかなり本質的な共通点～重なりがみられ、2種類の比較～検討は興味深いテーマになる。ちなみに安永も、中心気質の中の歪型の一つとして「ヒステリー型人格」をあげて論じています。

最後は、本書の内容と認知行動療法 CBT の関係。評者が気づいた範囲では、本書で CBT に関する記載がみられるのは強迫型性格においてのみであり、「(強迫型性格者の) このこだわりは、認知の歪みとも考えられるので、認知を修正するための、認知療法がこれらの人たちに適応となる可能性がある」(63頁)と述べられている。

しかるに私見では、実は本書の各性格において述べられている「特徴」は、臨床の場で(必要な際に) CBT の対象～テーマとなりうるものばかりである。すなわち、本書で述べられている「性格の特徴」を臨床現場で扱う営為が、CBT でも実際に日々行われている。

このような CBT の立場からすると、①こうした共通経験があるので、日頃 CBT を活用している評者にとって、本書の臨床的な有用性～妥当性に納得がいくように感じますし、② CBT のテーマとなりうる諸特徴を性格類型にまとめ上げた点に、本書の新味と獨創性があると思います。評者が、読者諸賢に本書の味読をお勧めする所以です。

『忘れられた森田療法——歴史と本質を思い出す』への書評に対する著者の応答

(京都森田療法研究所) 岡本重慶

本誌第41巻第5号に小著(『忘れられた森田療法——歴史と本質を思い出す』2015年、創元社)への書評が掲載された。数ある図書の中で批評の対象に取り上げて頂いたことに、まず感謝の念がある。同時に頂戴した批評に対して多少もどかしさも感じた。著者は、大学の教育系の学部学科に教員としての奉職、傍ら森田療法の原法の病院での診療、また企業の嘱託精神科医師、これらに長年の間従事した。そんな経験から湧出した思いのたけを本書に吐露した。毀誉褒貶、賛否両論の物議を醸すだろうと予測した。そんな問題の書を看過せずに書評を寄せて下さったが、正鵠を射抜いてほしかった。さいわい去る2015年10月に開催された日本森田療法学会の場で、評者(岩木久満子先生)にお会いして、拾い読みでの書評などと笑い話を伺う機会に恵まれた。しかしことは誌上で始まったので、読者諸氏に読まれる形で書評に対する著者の応答を開示させて頂きたい。以下、批評を受けた点ごとに、順次著者からのコメントを記す。

まずご批判頂いた点について。①教育や福祉や企業に森田療法を生かすことの重要性が本書で強調されているが近年そのような努力の成果が学会に発表されている、という指摘。これは論点が異なる。「森田療法を金科玉条とすれば森田療法ではなくなる」ことを懸念する著者として、森田療法を意識せずとも生き生きと森田的实践をなさっている方々が各方面におられることに思いを馳せ、同時に自殺に追い詰められる人が絶えない社会の現実を前に、拱手できない気持ちが言葉になった。②神経質概念について。ここでは誤解と混乱が生じた。評者が引用された著者の一文は森田自身の言説に依拠していて、文字通り「いわくつき」である。ちなみに昭和9年に森田の声をレコードに録音した「神経質講義」という有名な講演があり、「私の発見はコペルニクスの地動説」だと自負している。著者はそのような森